



「誰かのために」という思いが、諦めない心を育てる

中石 真一路 Nakaishi Shinichiro

コミュニケーションの方法は時代とともに進出し、現在ではメールやLINEなどテキストや画像でのコミュニケーションが増えています。音声によるコミュニケーションもこれまで同様に多用しています。

しかし、近年ではストレスやヘッドホンの過大入力による騒音性難聴などにより、声や音が聞き取りにくいと感じる若い人も増えていると言われていいます。このように聴こえにくくなってしまった場合でも円滑な音声コミュニケーションが図れるよう、コミュニケーション・サポートシステム「コミュニン」は2014年1月に誕生しました。

コミュニンは、音を大きくするだけでなく、音声の明瞭性を高めて言葉を聞き取りやすくするスピーカーシステムです。

2010年ごろに前職のレコード会社で新規事業開発担当として、遠くまで音が届くスピーカーの研究を行っていました。あるとき、共同研究先である大学の教授から、研究中であったスピーカーをたまたま試聴した難聴者の方が「聞き取りやすい」と喜んでいたと聞かされます。しかし、会社で事業化を要望しても、レコード会社には馴染まないとの理由で認められませんでした。

一度は研究の継続をあきらめかけたのですが、東日本大震災がきっかけとなり、「自分の仕事は誰かの役に立っているのか」との思いを強く抱くようになりました。そこで「まずは今自分にできることを始めよう」と思い、2011年12月にNPO法人日本ユニバーサル・サウンドデザイン協会を立ち上げました。しかし立ち上げたのもつかの間、「なぜ健聴者が難聴者のためにこのような活動を行っているのか?」「何か企んでいるのでは?」という声が上がリ、また研究が頓挫してしまいました。しかし1年間コ

ツコツと研究を重ねていくうちに「どうやら本気みたいだ」「協力してあげてもいいよ」といった声が出始め、協力者が現れたことで研究が進み、やっとのことで製品化を実現させることができました。

製品化を実現した当初も、「話す側が行う難聴者の支援」という説明を聞いただけで製品の必要性を理解される方はほとんどいませんでした。そこで、製品に実際に触れてもらうことが大切であると考え、ベンチャーのプレゼンイベントへの参加や、興味があるとされる方みなさんにお会いしました。製品はもちろんですが「製品への思い」と「難聴者への支援の必要性」を熱く語ることを地道に続けました。

そこで連絡をいただいたのが、佐賀県でした。県内でユニバーサルデザインを積極的に進められており、聴覚障がい者の方の支援に熱心で、「聴こえのユニバーサルデザイン」というコンセプトもすぐに理解していただきました。この出会いがきっかけとなり、2014年にグッドデザインベスト100を受賞することにつながりました。

5年前に研究をスタートしてから、何度も「もうダメかもしれない」と思うことが起きましたが、難聴の方々から「すごく聞こえやすい!」と笑顔をもらおうと「この人のためにも」という思いが募っていきました。今は諦めずに聴こえの研究開発を続けてきて本当に良かったと思っています。

中学生のみなさんにも「時間を忘れて熱中できること」「誰かのために頑張れること」を見つけてほしいと強く思います。

なかishi しんいちろう

専門学校卒業後、webサービス開発に従事。2012年4月、難聴である父と共にユニバーサル・サウンドデザインを設立し、2013年12月、耳につけない対話支援機器「comuoon」の開発に成功。広島大学宇宙再生医療センター研究員として研究に参画。